

ウマ娘に恋愛感情なんて
いていません

hsironeko

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ベースはアオハル杯シナリオ。

URAはちよつと前に発足してゐる感じ。

アオハル杯が開催される、そんな空気は一人の人によつて変えられた。

アオハル杯の廃止、そしてあらたな教育方針を掲げ、ウマ娘たちは追い込まれていく。

目次

第一話

—————

1

第二話

—————

10

第一話

人間よりも一癖二癖あるもう一つの生命、「ウマ娘」。彼女たちは競走馬の魂を引き継ぎこの世に生を受ける。腰付近からは尻尾、頭には大きな耳がある二次元で言う獣人のような姿をしている。が、人と違うのは人より容姿端麗であるため、アイドル的な人気を得ているということ。そう、彼女たちは簡単に言えばアスリートでありアイドルであるのだ。簡単に言えなかつたが。

まあ、前置きはこれくらいにして自己紹介をしようと思う。私の名は「桐生^{きりゆう} 和希^{かず}」ほぼ当て字のような名前に若干後悔している人間の一人だ。いやほんとに。慣れたところにボロが出るくらいには後悔してる。

生物学的に不明なところが多い彼女たちだがその行動は僕ら「人間」と何ら変わりない。睡眠は必要だし同じように運動すれば汗は出るし、ご飯は食べる（人参の消費量が多いのは内緒）。そして何より彼女たちには同じ種族の異性がいない。つまり恋をするお年頃になれば結婚も視野に入れるのだろう。まあ、箱入り娘たちがいきなり恋愛なんて無理な話だ。まさかアイドルと付き合いたい奴なんかいるわけないと思いたい。

言うのを忘れていたが私は「日本ウマ娘トレーニングセンター学園」。愛称、「中央卜

レセン学園」でトレーナー雇用された人間である。理由は多々あるが自分ではあまり語りたくないのですルー。ちなみに言うまでもないが女子校である。もう一度言おうか、女子校である。女子校である。

「何で女子高に男が？」って聞かれる前に弁護するとしたらあくまで彼女たちは「アスリート」で私はそれを補助する「トレーナー」である。下心なんてあるわけねえだろ。生物学的にわからないところが多い彼女たちにどうやって欲情すればいいのか全く理解に苦しむのが個人の意見である。まあ、可愛いのはわかる。ぬいぐるみだな。

「……」なら奴も来ないだろ」

学園校門入ってすぐ目に入る大きな木の下。私はそこにハンモックを取りつけて寄ってくる猫たちと一緒にゆっくりと倒れる。この上から木の葉の山をかけると最高なだけどなあ。自然と一つになれるし、理事長が開催する新レース「URAFアイナルズ」から目も背けれる。

…が、それもそうは行かなかった。

〈今より二時間前〉

「アオハル杯？」

部屋が最近になって散らかった理事長室。私と二人の同期の前に、理事長秘書の駿川 たづな（はやかわ たづな）さんと、ちびっこ理事長でおなじみの秋川 やよい（あきかわ やよい）がお馴染みの扇子と苦笑いで対面していた。そして俺たちに聞かされたのは「URAFファイナルズ」とはまた違った方向からのアッパーカットだった。

「うむ！かつてトウインクル・シリーズと並行して行われていたチーム対抗戦で、なんと！私はそれを復活させようと考えた!!」

「チーム対抗戦…」

「しかしチーム対抗戦はウマ娘、トレーナー両名に負担がかかることから中止になったのでは？」

「そう思ったのだが考えてみてくれ！最近になってトレーナーを決めれない子が増えている！」

まあ、理事長の言わんとしていることもわかる。メイクデビューも近いというのに、大半のウマ娘はまだトレーナーを決めれないでいる。多くのスカウトを受けているというもあるが…。期待に応えられない、など、自分に自信が持てない。そんな子が多いのも事実。

「そこでだー、君たちにURAFファイナルズと並行し！彼女たちの育成に尽力してほしいー」

「…多くのウマ娘とも触れ合うという考えでいいんです？それは」

「情報交換はウマ娘が成長する要因の一つ！頼む！」

…私以外の二人は頭を抱えている。まあ、トレーナーをとるか取らないかは彼女たちの自由だし。しかしチームを組めばトレーナーを決められるしとか決めやすいし、さらに互いにとつて良い練習になるかもしれない。ただウマ娘とトレーナー間にも犬猿の仲はあるわけで、

「メジロ家と関わらない条件なら全然いいですよ」

「ゴルシだけは勘弁してくれ」

「夫婦二人の喧嘩をどうにかするのとファル子を監禁する施設の提供を。困ってるんですわ」

まあ、嫌いなものがあればこうもなる。たづなさんがまともにメモを取ってくれてるのが非常に救いです。女神、天使、もう足を向けて寝ません。

ちなみに左側に立っている「ゴルシ恐怖症」になっている人物が「桐生きりゆう 泰河たいが」血のつながった兄弟ではなく私を引き取ってくれた家族。年齢的には義弟になる。担当ウマ娘はみんなの姉御肌で有名な「ヒシアマゾン」である。真面目な人柄だが怒らせたこ

とはないが、ヒシアマゾンが一度怒らせたとき死にかけたらしい。いろんな意味で（ただしゴルシには勝てない）

右側に立つ人物は「堀^{ほり} 朱鳥^{あすか}」女性。担当は「シンボリドルフ」立場や性格的に言えばエアグルーヴ寄りの女性だが自分にも厳しいのが難点の人。年上のお姉さんでたづなさんと歳がどっこいどっこいだと聞いたが、。鋭い視線が目の前から感じる。この話はここまでしておこう。

自分はメジロ家が大っ嫌い病に陥っている。彼女たちは約二名プライドが高いお嬢様集団だから困る。私を見るなり突つかかってくるから、さらには罵声も浴びせてくる。挑戦状をたたきつけてくる馬鹿もいる。筋トレしてるかっこいいお嬢様と陽キャお嬢様、清楚お嬢様は比較的まともだが約二名のせいで全体的に嫌いになれる。そのほかにも上げれば無限に理由は出てくる。

「…注文が多くないか？」

「「気のせいでは？」」

私たち三人はほぼ同じ時期にトレセン学園に入った仲間だ。ここのお嬢様たちも多少なりとも仲がいいと、思ってるんだがなあ。実際はわからない。好感度がわかる眼鏡とかアプリとかないのかな。

「ともかくだ！三人ともよろしく頼む！」

「ところで理事長室はなんで荒れてるんです？」

「そのことなのですが、、」

「じ、じつは、理事長は大人の事情でここを離れることに、、」

アホらしいと思ったこの時が。後で絶望に変わるなんて思ってたなかった。

「チケット見えたから海外絡み、、かな。にしても唐突だけど」

理事長の話では地震が学園を離れる間は理事長代理に「アオハル杯」等、学園行事を一任するようで具体的な内容は代理の人が到着してからになるらしい。あの人がいなくなるはなるで少し寂しい部分もあるが、そこは大人の用事なのだ、諦めるしかない。

それより目の前のことをどうにかしないといけない。URAFファイナルズと並行して行われる新レース。「アオハル杯」チームを組んで短距離、マイル、中距離、長距離、ダーートの5レースを走る。5戦行い3勝

したチームの勝利。引き分けの場合代表ウマ娘による1vs1のレースを行う。勝者と敗者を決める、シンプルなルール構成になった。ジュニア級12月後半からシニア級6月後半までに行われる計4回のプレシーズン戦を戦い、チームのランクを上げて、最終的に成績上位2チームによる決勝戦が行われる。

「…レーナー!、トレーナー!」

「アオハル杯は強制じゃないからいいとして。問題は理事長代理の人柄かな」

「見つけたぞ!トレーナー!」

「気持ちよく寝てんのに大声はやめてくれないか」

目の前に広がる大きな影、その本人の姿を見る前に私のハンモックは紐をちぎられ身体は無様に地面に叩きつけられる。見下される鋭い視線、完璧に引き締まった脚、太もも、そしてアスリートには似合わないスカート、、、?

「今日はスパッツか。乙女にも恥じらいはあるんだな」

「アンタが穿けと言ったんだ。文句は?」

「ないが脚はもう少し隠せ。冬になったら身体を冷やすぞ?」

鼻に絆創膏をつけた不愛想な黒鹿毛ウマ娘、「ナリタブライアン」が鋭い視線とともに頭を足でしっかりと支えて立っていた。風は思っていたのとは反対方向に吹いていて、彼女のスカート、制服、髪が全部私側に来るからその、、、スカートの中が見えるんです。

まあ下着を隠せとは言ったが、まあ、いいや。穿いてくれてるなら感謝。

「ブライアンのトレーナー君、ここにいたんだね」

「しょんぼりルドルフさんこんにちは。ちなみにこのハンモックの修繕費って生徒会で、」

「落とせるわけないだろ。たわけが」

後ろからブライアンと同じ生徒会所属の現会長「シンボリルドルフ」と女帝「エアグルーヴ」がツカツカと歩いてくる。しょんぼりルドルフというのはしょんぼりしたルドルフが可愛かったから、マスコットの意味も込めて、「トウカイテイオー」とともに名付けた愛称だ。エアグルーヴから冷たい目をされるが会長様の寒いギャグよりマシだと思ってる。

「ちつ。まくた「セイウンスカイ」に謝るのか。私は」

「自業自得だろうが。ところで貴様、練習に付き合え。というか来い」

「何です。今日はフリーで任せる日にしてあるはずですが。練習を束縛する気にはなれませんか」

メイクデビュー前の方針は特に決めていないので出るレースを決めたらあとは彼女に一任している。出たいレースがあったら出る。練習したいんだつたらする。ダメ教師のようだが、あんまり練習に文句を言いたくもないので大体任せている。自分のスタ

イルを押し付けるのは好きではない。

「馬鹿者。レース場の確認だ」

「…もうですか」

「確認は早めにしておいたほうがいいと頼まれてしまつてな。共に来てくれるか？」

「女帝様と皇帝様の誘いを断るつもりはないですよ。喜んで行きましょう」

「私もお願いがあるのだが…」

「ブライアンのお願いは後で聞いてあげる。先にレース場の声を聴こうか」

レース場の声を聴く。それがトレーナーとしてできる最低限のことだから。そう言い聞かせ、私はエアグルーヴに手を引かれながらメイクデビューで使う用のレース場の確認へ行くのだった。

第二話

アオハル杯を開催するという理事長の宣言は学園中のウマ娘を興奮させた。普段冷静な娘でも興奮を抑えられないのを見て分かった。その後の様子は様々だ、アオハル杯に向けてメンバーを集めようとしている娘、他の娘と組んで一緒に練習している娘、その様子を羨ましそうに見ている娘、。。

「あら、トレーナーさんではないですか」
「紫カボチャさん。こんにちは」

コース場から少し離れたところで寝ていたら一番会いたくない奴に遭遇してしまった。紫がかつた芦毛のロングヘアで、右耳に緑色のリボンをつけているウマ娘、名門「メジロ家」のウマ娘、「メジロマツクイーン」だ。頑固で減量中にも関わらずケーキを隠れて食べているアホではないのかと思うウマ娘だ。決して可愛くはないです。

メジロ家の中では変人との付き合いが多い彼女。あのゴールドシップやトウカイテイオーといった学園の問題児、、テイオーはそこまでもないが。同室のイクノデイクタスが個人的に世話を焼いているウマ娘、ツインターボ（師匠）とも関わりあるマツクイーンは日に日に毒されている感じがしてたまらない。

「む、紫、！」

「ちようどいいだろ。そつくりだ」

「決闘ですわ!! さあ! 手袋を拾いなさい! 今日こそ決着を!!」

「うるさい。手袋うんぬんは投げてから言え、あとお前と戦ったことないわアホ」

やつぱりアホなんじゃないか(呆)

「ま、まあ。今日のところは許してあげましてよ。それで? 考えていただけましたか? メジロ家に仕えることを」

「もう家は関係ないし、それにそういうのは姉妹にも話すべきでは?」

「話してますが?」

「じゃあ黒カボチャを何とかしろ。出会う度に罵倒されるこっちの身にもなってくれ」

またこの話だ。メジロ家のおば様方はどうやら彼女たちの意見より自分たちの意志を尊重させる親として、いや、過保護というべきか。しかしマックイーンもいい年なのだからいい加減男と二人きりというのは変な誤解を生むからやめてほしい。

一応説明しておこう。「メジロドール」マックイーンと同じくメジロ家のウマ娘で
ご同輩。姉妹というか同期の方が言い方的にはいいのかもしれない。男どもの間では
「箱入り娘」といわれている。が、本人に近寄ることは誰もできない。というかしない。

理由としては彼女が超・男嫌いの性格をしているからだ。まるで虫でも見るような目

で見てくるから彼女のトレーナー志望は女性しかいない。クールな性格から男女ともに人気があるが私は性格も相まってそんなに好きではない。言葉にするなら「嫌い」の二文字だろう。彼女に認められることはメジロ家の婿入りに近いともいわれるくらい攻略は難しい。絶対無理。三回言います、無理。

「むむむ、、どうすればライアンやパーマーのようにあなたに接することができるのでしょうか」

「生まれ変わって見せろよ。お嬢様」

「生まれ変わったら接してくれますの?」

「その時に期待」

生まれ変わったからってそれが本人であるとは限らない。まあ運命に期待するしかないだろう。漫画で言う神様のいたずらだろうか。まあ別に生まれ変わってもコイツと関わることはない。

「それで?用事は何です?」

「あなた、集会に来なかつたでしょう?」

『集会』少し前にウマ娘とその担当トレーナーたちが突然体育館兼講堂に召集された。

理事長代理の紹介、挨拶と突然の「管理教育プログラム」の発表。もちろん話は広報部担当「メイショウドトウ」から聞いていた。

「樫本 理子」自分がこのトレセン学園に来る理由になった一人であり、何より師匠とも呼べる人物。自分のトレーナーとしての経験はすべてこの人から教わった。

「それが何か？」

「あなたは、あの人の方針を認めるおつもりで？」

「可もなく不可もなく。言っていることは理解できるし、そういう事もある」

「あれでは教育より監禁ですわ。おばあさまなら声を荒げて否定していますわ」

今まで自由とも呼べる教育方針を掲げていた理事長とはまた違った方針。まあ、教育方針が突然変わることに対しての動揺も、内容の批判もわかる。しかし、「郷に入っては郷に従え」だ。あの人の城になった以上俺たちはそれに従わなくてはならない。

「私たちは道具ではなく競技者ですわ。自分のモノだと勘違いしているのかしら」

『私は道具ではなく競技者、あなたはトレーナー、でしょ？』

横を向いて、それでも視線はまっすぐな「メジロマックイーン」の姿と彼女の放った一言は、どこか「彼女」を俺にイメージさせた。俺はすぐに彼女から視線を外して見えないようにすぐ近くの芝を力任せに引きちぎる。口は、見えはしませんが唇がわずかに痛かった。

「どうしました？」

「…何でもない。それよりみんなの反応は？」

「様々、ですわ。渋々受け入れる人も、思いつきり否定する人も。まあ、皆さん黙っていないのは確かですわね」

…そうだろうな。いきなり自由だったのが監獄当然。トレーナーもウマ娘も「ルール」という鎖に縛られた監獄生活を送るわけだ。保育所レベルから格段に下がったといえるだろう。

「受け入れる」といつてもただ黙っているだけだろう。「ミホノブルボン」か「エイシンフラッシュ」か、また「ピワハヤヒデ」だろうか。黙っていても一時的なものだ。いつか周りに流されてすぐ否定論を掲げる。

否定するのは「理解」をしようとしなから。

受け入れたくないのは「理解」をあきらめているから。

気持ち悪いのは「理解」をしていないから。

「彼女」だったらどうするんだろうか。

どんな険しい道もまっすぐ走っていた「彼女」なら。

「あ…」

「え？」

「明日、理事代理に相談してみようとは思う」

「自分」がどうしたいかなんてのはわからない。

「彼女」たちがどうしようとして自分には関係ない。だけでも、それでも。

「彼女」が悲しむ顔を見たくないから。

*

夜、トレーナー寮は静かだった。

帰ってくるトレーナーたちの反応は様々だった。

「明日。行って何が変わるのかな」

正直あんなことを言ってしまったのは後悔している。自分一人が否定したところで、いくらこの学園のウマ娘の協力を得ても無駄な努力だったのはわかっている。あの人はそういう人だ。一度決めたことはとことんやり尽くす支配者。それが先生のやり方だった。

unnecessaryものは考えから捨てる。最適な答えだけを出し。トレーニングに、。

「ん？電話、」

トレーナーレポートを纏めているとき、支給されていたスマホに電話がかかってく

る。相手は担当「ナリタブライアン」だった。

「もしもし」

「トレーナー……か？今、電話してもいいだろうか」

どこか不安げな声。体調が悪いのか、それとも何かあったのだろうか、机の下にあった救急箱に手を伸ばし引き出しからは自身のプライベート用スマホを取り出す。いつでも対応できるように靴を履き替えようとする。

「大丈夫だよ」

「トレーナーは……代理の話に賛成なのか？」

……コイツは今何を言った？

わずか三秒、思考が冷静になるには十分な時間だった。ほとんどのことに興味を持たない「ナリタブライアン」が？心配を……したのか？

俺は安堵の呼吸を静かに、電話越しの彼女にも気付かないように吐き出す。救急箱は手から滑り落ち地面と激突して大きな音を立てる。

「と、トレーナー!?!」

「大丈夫大丈夫。物を落としただけだから」

正直ビビった。数ヶ月で大体の性格は聞いていたつもりだった。

シンボリドルドルフからは「寡黙で静かだが良い奴だと」

エアグルーヴからは「仲間思いでそれを言葉に出さない奴だと」
ビワハヤヒデからは「自慢の妹だと」

担当に決めてから数ヶ月過ぎた中で彼女の性格は話を念頭に置いて探って来た結果が今の彼女の性格だと思っていた。心配事も不安も悩みも、決して口には出さない奴だと思っていた。

メンタルチェックなら、たづなさんが気を利かせてくれるだろうし。練習している中で彼女の仲間がきつと言葉に出さない彼女の代わりに言ってくるだろうと思っていたが…。

「少し驚いた。君が心配事を聞いてくるなんて」

「そうか。しかしこれだけは聞いておきたかった」

「一体どうして？」

「…副会長エアグルーヴ シンボリドトルフや会長エアグルーヴ シンボリドトルフは良い性格だ。明日、みんなが言わなくても恐らく…」

直訴しに行くって事だろうか。いや、彼女たちの性格を考慮すれば当然の行動か。

しかし、彼女たちの言葉を素直に聞くほど先生は甘くはないし、ウマ娘の事となると人一倍厳しい。停学は…無いだろうが謹慎はありそう。

「管理教育プログラム」が機能しだせばウマ娘とトレーナーの「関係」はそこで終わりだ。「ルール」の中でしか彼女たちと触れ合うことは出来なくなる。

外出も許可を得てからの外出となり、夜間外出は大幅に制限される。ウマ娘もトレーナーも。

先生の事だ。最悪監視を付けざるを得ない行動に出るのかもしれない…。

「明日、その件について文句を言いに行くつもり」

「そうか…」

そこから先はお互い何も言わない。理事代理に文句を言うことは相当のリスクを負う必要がある。担当トレーナーなら尚更。

自分ならどうなっても構わない。中央トレセン学園に居られなくなっても別に構わない。

「…おやすみ」

何かを言いかけたナリタブライアンとの通話を切り、自分は柔らかいソファの上で横になった。



「おはようございます。トレーナーさん」

次の日の朝。目の前と身の回りの情報整理から始まる。

昨日はナリタブライアンとの通話の後ソファで寝て…そこからは覚えていない。寝たのが最後の情報、昨日の終わりだと理解した。

次に情報の取得、自分の身体には毛布が敷かれていた。

夏場に差し掛かった時期には似合わないモフモフの暖かそうなやつだ。そのあと、鼻に味噌の匂いが入ってくる。

「え？味噌？」

「はい。今日は味噌汁ですよ」

机の向こう。ウキウキ気分で尻尾を揺らしながら鍋をかき混ぜていたのは「聖母」の異名をトレセン学園で騒がれているウマ娘「スーパークリーク」だった。今日は私服で部屋にあらがられていた。あれ？鍵は掛けたような…。

「鍵なら寮ヒシマツン長さんからお借りしました」

やりやがったなコノヤロウ。ちなみに「聖母」と言われているのはただ「優しい」だけではない。

彼女の優しいと言われる部分は「お世話さん」だと言うところだ。エアグルーヴと同じで部屋が散らかっているのは見過ごせないし誰だろうと頑張ったら褒めたくなる。まさに「理想のお母さん像」だろう。

しかし、その「お母さん」体験をしたゴールドシップは後にこう語った。

「アイツは聖母だ…」

目が死んで、身体も全身が痙攣していたゴールドシップは多くのトレーナーの前でその言葉を発したあと、倒れ込んだという。そしてしばらくスーパークリークの幻影を見た。

「黄金の船を沈めた聖母」としてスーパークリークはトレーナーの間での伝説となったのだった。

彼女に「お世話」されると骨抜きにされる。ある種での恐怖が七不思議に追加された。

「わざわざ自分とこじゃなくてもいいんじゃないですかね」

「いいじゃないですか、久しぶりのママでちゅよ」

「うぜエ…」

気分はまるで反抗期の小学生だ。いつまで経っても子供離れ出来ない母親にウンザリするってこういう気分なのだろうか。「タマモクロス」と「ナリタタイシン」の気持ちちが少しはわかったかもしれない。

スーパークリークは俺がそう悩んでいる間にも素早くお皿をテーブルに並べる。サラダにご飯に味噌汁に…、健康的な日本食だ。素直に美味しそう。

「ところで今日はどうしてソファに？」

「あ…夜更かしをしちゃったんですよ…つい？あ…」

気づいた時には遅かった。スーパークリークが席を立ったと同時に俺は玄関へと走り出す。

「ぐべえ!?!」

「ふふふつ…じゃあ休まないといけませんね」

眼に明らかに違う光を宿したウマに捕まった。そうウマく行かないものだな…つて、シンボリルドルフに頭で怒られた気がする。

そんな事より、玄関一步手前で無様に転がっている俺の手を二つ、後ろに回すと彼女の胸ポケット（物理）から取り出したテープで手をぐるぐる巻きにされてしまう。

「トレーナーさんはゆっくり休んでくださいね？私が食べさせてあげます（ニコニコ）」

「やめろオ！ゴルシ！ターボ！いけに…タマモ！助けて！」

「生贄うなア!?!」